

成立過程が事例研究されている。

20世紀日本の歴史を戦前（ファシズム）と戦後（民主主義）に二分する通説的認識に対しては、既に山之内靖を中心とする歴史社会学の立場から、戦後改革を戦時中の総力戦体制構築に向けた社会の編成替えと直結したものとして理解する理論が提示されている（『総力戦と現代化』1995年、等）。本書は、戦後の高等教育制度改革の発議段階（端緒）が、1920年代にまで遡上できることを実証したことによって、山之内理論を歴史的事実を伴うものとして補強するものともなった。

本書の刺激的な成果は、20世紀の日本教育史に関する認識枠組み自体の再検討を強く求めている。同時に、本書は、日本に関する教育史（教育学）研究であっても、近隣のアジア諸国はもとより欧米の研究者との研究交流が不可避の時代となったことも教えている。いずれにせよ、今後の日本近現代の教育史研究は、本書が切り開いた地平を前提にしなければならないだろう。最後に、本書巻末には、本書が依拠した膨大な一次資料の一覧、そしてドイツ及び英語圏における日本教育史（日本学）に関する文献一覧も付されていて、研究者の便宜が図られていることを付言しておきたい。（Akademie Verlag, Berlin, 2006, 317pp, ISBN: 3-05-004278-8）

ジェーン R.マーティン 著

生田 久美子 監訳・解説

『スクールホーム 〈ケア〉する学校』

坂本 辰朗（創価大学）

本書は、ヴァージニア・ウルフの著名な『3ギニー』（1938年）の1シーンから始まる。旧世界（家庭）から新世界（公的な世界）へと橋を渡って出て行く男性たち。その行進に、ちらほらと混じる数少ない女性たち。ウルフは自問する。「私たちはあの行進に加わりたいと望んでいるのか？ 加わるとするならば、誰が定めた条件で？ いや、そもそも、あの行進——高等教育を受けた男性たちのそれ——は、私たちをどこへと導こうとしているのであろうか」。ウルフにとって、公的な世界とは、人間性の喪失した腐敗した不道徳なそれであった。どのようにすれば、女性たちは、男性た

ちとともに橋を渡り、しかも人間性を喪失しないでいられるであろうか。これが、当時、ウルフを悩ませた問題であった。

今日、特に、アメリカ合衆国では何百万という女性たちが橋を渡り公的な世界へと出ていっており、今やその新規参入者の3人に2人は女性という状況になっている。しかしながら、ウルフが決して問うことがなかった問題、すなわち、女性たちが橋を渡り公的な世界へと出ていった結果、家庭の中に残された子どもたちをどうするのか、という問題が、解決されずに、事態がさらに悪化してしまったのである。

20世紀初頭、デューイは、当時のアメリカ社会が農業社会から工業社会へと変貌を遂げつつある中で、家庭が担っていた伝統的な教育機能が破壊されてしまったことを指摘し、この失われた教育の機能を学校が果たさねばならないと説いている。家庭と学校との密接な関係へのデューイの着眼は高く評価されてよい。だが、デューイは見落としてしまっていたのであるが、家庭から外へ出てしまったのは仕事だけではなくたのである。それとともに、仕事をする人々、男そして女もまた外へ出てしまったということである。

男も女も外へ出てしまった後、家庭の中に残された子どもたちはどうしているのか。著者は、現在のアメリカ社会で子どもたちが置かれている恐るべき環境を逐一描き出す。とりわけ、ホームレス世帯（著者によれば、平均的なホームレス世帯は母親1人に子ども3人）の子どもたちの置かれた環境は信じ難いものである。

著者は、ここで、20世紀初頭のイタリアのローマで行われた革新的な教育実験である、モンテッソーリによる「子どもの家（Casa dei bambini）」に着目する。極めて劣悪な環境の下で放置されていた浮浪児に近い子どもたちを集めて行われたこの教育実験は、一般的には、子どもの自由と興味を重視するいわゆる児童中心主義を原則とした上で、集中力を養い個別の学習を可能にする体系的な教具（モンテッソーリ教具）を工夫したことなどが高く評価されている。だが、これはモンテッソーリの実験の核心を見落とした評価であった。「子どもの家」における「奇跡」は、そこにいる子どもたちが家族としての一体感を持っていたという事実を抜きにしては説明することができないものであり、「子どもの家」とは実は「子どもの家庭」

であったのであり、モンテッソーリは、およそ教育にとって決定的に重要であるのは、家庭的であること(domesticity)、すなわち、最も理想的な意味での家庭的環境と雰囲気であることに気付いたのであった。

著者は、モンテッソーリが創りだした「子どもの家庭」を21世紀に復権すべくスクールホームを構想する。スクールホームは、「家庭の道徳的代替物(moral equivalent of home)」である。モンテッソーリの「子どもの家庭」がまさにそうであったように、そこで子どもたちは、安全で温かな雰囲気、自分が皆にとってなくてはならない一員であるという帰属感と一体感、他の家族成員への愛情や思いやり、ともに分かち合う喜びと悲しみなどを実感することができるのである。

著者は、2つのカルチャー(文化あるいは教養)を区別する。1つは、英語の大文字で書くCultureであり、これは伝統的に学校教育で正統的とされてきた西欧中心で男性中心のキャンノンとしてある。だが、このようなカルチャーに対して、実は、それを根底で支えている別のタイプの(英語の小文字で書く)cultureがある。それは、他者への配慮と関心とつながり(care, concern, and connection)という、人間として基本的に備えるべきものである。これらの2つのタイプのカルチャーは、従来は、学校と家庭の分業体制によって維持されてきた。だが、もはや家庭において子どもたちが小文字で書くカルチャーを身に付けられなくなっている。

子どもたちにとって生活していることの意味が実感できるような学習経験とはどのようなものであるのか。著者によれば、「生きることを学ぶ」とは「一緒に生きる(living together)ことを学ぶ」ことである。階級、ジェンダー、人種、エスニシティが多様な子どもたちが一緒に生きることを学ぶために、スクールホームではどのようなカリキュラムが中心になるべきか。著者は、これまでのカリキュラムにおける、思考と行動、精神と肉体、理性と感情の分裂を問題にする。これを克服するために、演劇とジャーナリズムをスクールホームのカリキュラムの中心に据える。スクールホームでは、生活のあらゆる場面が教育的意義を持つのである。

(東京大学出版会刊 2007年5月発行 A5判 312頁 本体価格4,200円)

馬越 徹 著

『比較教育学 越境のレッスン』

杉本 均(京都大学)

比較教育学の歴史は旅人の無意識の旅行記に始まった。本書著者の経歴も、学生時代、旅人として「越境」することにより、何かを比較していた時代に始まった(旅人の時代)。19世紀になり、各国の行政官による外国教育調査により教育制度の「移植」が行われた。著者も文部省大臣官房調査課に職を得て、日本の教育制度を輸出するために相手国の実情を調査した(行政官の時代)。20世紀になり比較教育学は大学の講座として学問の領域となったが、著者も1960年代から日本比較教育学の中心地であった九州大学教育学部・比較教育文化研究施設に助手として勤め、ソウル大学に長期留学を行った(大学人の時代)。そして今日、比較教育学は国際的に組織化され、世界の教育政策にインパクトを与えるまでになった。この時期著者は奇しくも日本比較教育学会の設立(1965年)や世界比較教育学会の結成(1970年)に立ち会い、名古屋大学に赴任し、「比較国際教育学」小講座を創設し、日本比較教育学会の会長に就任してその発展に尽力した。(組織化の時代)

本書の序章「比較教育学と私——越境のレッスン」は単なる比較教育学の教科書ではなく、「比較教育学の歴史に自分史を投影した」「系統発生論的」方法による著者自身の自分史でもある。世界における比較教育学の発展の歴史を「系統発生」とするならば、著者の比較教育学者としての個人的成熟の歴史が「個体発生」において繰り返された「系統発生」として描かれている。こうした相同は誰もが経験できるものではないが、読者は学生や研究者としての自己の成長がどの発生段階にあるのか自問するに違いない。本書の第1章「1990年代の比較教育学研究」、第2章「『地域研究』と比較教育学」、第3章「比較教育学教育の課題と方法」も、こうした比較教育学の歴史と方法論、そしてその教育について、同様に筆者の個人史が並置ないしは投影されてみごとに語られている。

第4章「比較教育学の教育研究基盤」は、名古屋大学における小講座「比較国際教育学」の増設と、高等教育研究センターの創設という、2つの日本初の比較教育学研究組織の整備に成功した際